

の價值を結論として筆を擱げり。以上の各章に亘りて著者の識見と蘊蓄は到處に窺知し得られ西洋史界稀有の好著として、本書の公刊が學界に裨益を興ふるに大なるは論なし、而もこは昨年の京都大學夏期講演會に於ける講演より成れるを以て、その説述平易を旨とし、考證を避け論旨簡明峻達にして興趣深き筆致は一般公衆にも容易に其綱領を會得せしめ得べし。加ふるに各章末に添附せる約百餘箇の寫眞圖は本文と相俟ちて讀者に有益なるものなりん。(文會堂發行、價二、五〇)〔植村〕

●登山の注意

日本山岳會著

近時登山の趣味青年學生の間に普及し、夏期に於ては富士の如き日本アルプス諸峯の如き登山者相次ぐに至りしは學術研究上又剛健の氣風養成上に頗る悦ぶべき傾向なるが、而も不用意の爲めに往々山中に慘死するものあるは頗る危懼の念を懷かしむる所なり。本書は登山の際の危險を詳説して冒險的の登山者に警告と注意とを與へたるものなり、此種の著作は從來これなきにあらざれども本書は登山専門家の團體なる日本山岳會の手になりしものにて聊か他と異なるものあるを覺ゆ。本書、初めの登山の危險なる理由を述べ、次に氣象上の激變に基く危險、山嶽に固有なる危險、危險を避くべき手段、登山の準備事項等を長き間の經驗に基づき且歐洲に於ける登山術 (Alpinism) を參酌し記述したるものにして、

人夫使役の手加減、天幕の張り方等にまで及べるは極めて懇切且つ周到と云ふべし、登山者並びに山岳研究家の指針として一讀すべき良書なりと信す。(日本山岳會發行、非賣品)

●地球上に於ける植物群界の分布に就て 神谷辰三郎著
本篇は「サイエンス」第七卷の特別號として出でたるもの、著者は元第七高等學校造士館教授として植物學を講じ、今島津製作所に入りて研鑽を續けつゝある篤學の士なり。著者の取扱へる如き植物地理學は地理學の一分科として歐米に於ては可なりの發達を遂げたるも比較的新しき學科なる上之が關係する科目頗る多く最も主要なる地理學植物學は勿論廣く分類學、生理學、地質學、氣候學、經濟學等に通曉せざるべからず、是れ本科の進歩進々たる所以にして殊に我が國にては組織的に此の種の試みをなしたるものあるを聞かず、著者此に見る所あり、植物學の見地にのみ偏せず地理學の外廣く關係學科をも考慮して從來闕却せられし方面を開拓せしものなり、其記述の方法は各地方に就きて地形氣候等の環境を明かにし之に應じて如何に植物區系 (Zones) が分布され此等が人生に及ぼす影響等を論じたるもの、而して各大陸の區劃の細分は主として地形によりたる氣候を基としたるをありて一定せざれども要は其地方の特有の植物區系をなすものを取りて單元とせり著者自らも頁數に制限せられて唯一般的記述に止めて植物地理學

の一端を窺知せんのみと言へる如く個々の事項は餘り簡に過ぎ又其重きを置ける點が那邊にあるかを疑はしむる感なきにあらざれど極めて平易に書き下され(Floas)の概念を得しむるには足る、尙同誌第七卷一號所載同氏の「地球上於ける主なる植物群界に就て」及び同卷七號所載同氏の「植物群界の生成に必要な生活條件に就て」に其通論及び理論的方面の研究あり、本篇を併せて一讀の價値あるべし。(鳥津製作所發行)

● James Geikie, Mountains their Origin growth and decay 1913

地理學の主要部たる地形學、又其の主要部を占むる山岳の研究を英國の地形學の泰斗が纏めたるもの、山岳を分類して主として其成因の上より之を原成或は構造山と浸蝕による後成山とに二大別し、更に其各を細分して一一其成因、地質構造、山容より其發達地形の變化及び遂に其形を失ふに至るまでの經路を理論的に又實例に就きて論じ、褶曲山脈の適例たるアルプ山系の各山列の地形と其變遷等は殊に詳論する所あり且つ卷末に山岳に關するあらゆる術語を集め之をアルファベット順に排列して説明を附したり、著者の山岳に關する作は之より以前に發表したる Mountain structure and its Origin (International monthly 1909)及び Architecture and Origin of the Alps (The Scottish Geographical Magazine

1911, 1912)等あり、本書も其等を基にし尙諸家の説をも參酌して完成せるものとす、近時我が國に於て山岳趣味の普及せんとするに際し尙も地形學に志すものは勿論山岳に對して科學的解釋を試みんとする人々の精讀すべき好著なりと思惟す。

● H. Stanley Jevons: British Coal trade 1915.

石炭が工業の原動力として國家經濟の基本の一にして經濟地理學上重要な項目たるは絮説の要もなからん、本書は世界第二の產地にして鐵の産と共に工業上一方の謂を稱する英國の石炭を取扱へるもの、著者は當時英領印度アルラハバード大學の經濟學教授にて嘗ては英本國のサウスウエールズ及モンマスシャー大學に於て政治經濟の講座を擔任せることもあり、而して石炭に就きて造詣殊に深く從來此に關する多くの著書ありて斯學界に重きをなせる人なり、此書石炭及炭層の性質、石炭の用途等より説き起して英國の炭田、其採掘法等より石炭貿易、企業家合同組織等に論及し更に勞銀問題坑夫の生活問題等にも觸れ最後に英國の石炭の將來、世界に於ける石炭の埋藏を以て結び尙卷末に附録として坑夫會社石炭實買契約、石炭鑛業法拔萃等を添へたり、即ち石炭の性質、炭田分布採掘の方法等の一般的説明は本書の主眼とする所にあらずして其の特質は十一章以下の石炭の經濟的社會的考案にあり、此方面に於ては殆んどあらゆる場合を擧げ之に對して一一著者

獨特の意見を述べ殊に第二十六章の石炭問題 (Coal Question) に於て最もよく其卓見を窺ひ得べし、而して此等は當に英國の事情を明かにするに止まらず、廣く世界の石炭經濟にも適用せられ經濟地理學研究に資する所少なからざるものあるを信す。

● L. S. S. O'Malley, Bengal Bihar and Orissa

Slackin 1917.

英本國及び其領土の地方誌としては曩にオックスフォールド調査英帝國 Oxford Survey of British Empire 及びケンブリッジ郡誌 Cambridge County Geographies 等の浩瀚なる叢書あり、前者は既に完成し後者も年を逐ひて繼續的に出版せられつゝあり、而して英領印度の地方誌は前者のアツア洲の部又は Indian Gazetteer 等備はりて各方面の研究殆んど遺漏なきも、小なる行政區劃の詳細を知る能はざるを憾みとせしが近時 Dr. H. Holland 氏監修の下に各地力の地理に通曉せる人々に託して印度各州誌 Provincial Geographies of India がケンブリッジ大學出版を計畫せらるゝに及び其缺陷を補はんことを至れり。本書は其叢書の第三卷を以て The Madras Presidency with Mysore, Coorg, and the associated States 及び The Panjab, North-west Frontier Province, and Kashmir に次ぎて出でたるもの、地又人文の各項に亘り最新の材料を取扱ひ最近の測定に據りたれば其内容の取るべきもの多

きは勿論、其記述の方法にも新しき試み少からず。我國の縣郡誌編纂の任に當る人々に他山の石として推奨する所なり。

● 古明器圖録

東山學堂印行

羅振玉氏の編纂に係り、同氏所藏の支那漢六朝より唐代に至る古明器類の逸品を集めて印行せるものなり。全四卷にて、第一卷には甗、土甗の類八十三種、第二卷には竈、井、臼、牛車、鹿等の器物類三十八点、第三卷には家畜の屬四十、第四卷には墳墓二十四点を收めたり、而して初に簡單なる解説と目錄に年代を附せるものあり、何れも鮮明なるコタイプにて印刷されれば、この種遺物研究者にはよき材料となるべし。(定價六、〇〇)

● Shinji Nishimura: The Kumano-no-morota-jame. (The Many oared Ship of Kumano)

船の研究者として名ある西村真次氏の著すところ、氏か日本古代船舶研究の第一冊として去る八月早稻田大學より出版せるものなり。本文七章三十一頁、圖版五葉、小圖十六を收む。

緒論に於て著者は船舶の研究の本邦上古史上重要なる意義あるを云ひ、その興味ある一例として熊野詣手船を選び、第一章に於て紀元神話に表はれたる此の船の解釋をなし、第二章は熊野詣手船若しくは天鳥船の語源を研究して其の構造を辿らんと試み、第四章以下に於て出雲美保神社の祭禮と之に使用せらるる、諸手船の

構造を記して、それと構造の似たりと云ふ朝鮮の三角形小船、アイヌの漁船、さてはアムールの箱船の形式構造を論じ、滿洲の船形棺に及び結論に於て古代の熊野諸手船の構造を推定して、これが出雲派民族に使用されしもの、其の起源はアムールの箱船に發し朝鮮の三角形小船と連絡あり、之より古代日鮮關係を窺ふべしとせり。卷末の圖版及挿圖はこの本文と相對して讀者に興味を興ふる多し。

此の熊野諸手船の起源に關する研究、殊に第二章の語源の解釋の如きは學者の同意を得べきや否や未だ知る可からず、猶研究の餘地あるが如きも、諸手船が古式の構造を繼承せるは夫道湖中海に今猶行はる、一種の獨木舟と共に此の記述に於て明に認むべく七俗考古學上に注意すべき論文と云ふべし。(價一、〇〇)(梅原)

● 雜 誌

● 「座」の起源と其語原

文學博士 三浦 周行

(國民經濟雜誌第廿三卷第一號所載)

「座」に就ての研究には、先きに福田博士、柴謙太郎學士あり、頃者、又三浦博士は經濟論叢(第三卷第三・六號、第四卷第六號)に於て「座」の研究」を又中山太郎氏「座源流考」(歴史地理第廿九卷第三・四號)を發表せられたりしが、更に又博士は「座」の起源及其語原に就て其研究を示されたり、最初に、「座」の意義に關する諸説」

として福田博士、柴學士、中山氏の説を掲げ、次に「諸説に對する批評」として福田博士の座や座がクラ又はイチクラの漢譯ならんといふ第二の假定説を排し、座の制度の起源を平安朝に置かんとする説に對して、關市令を引きて其奈良朝にも存せりとなし、柴學士の座の語原に關する記述は尙明晰を缺くとして、氏が商工業の座の起源を専ら社寺關係のものに限らんとするの餘り、座の語原を座席の意味の外に社寺關係の語原を有すと思惟されしに非るか、又氏は商工業者と權門勢力との關係を室町時代に至りて始めて生せりと言へるは材料に捉はれし嫌なきにしも非ずとて、商工業者と社寺との關係鎌倉時代に遡ると同時に、他の本所との同一關係も亦推知すべしとし、中山氏の説は批判の範圍外なりとて言及せず。「座」の起源に關する管見」に於て、座の由來は極めて古く

品部の間にも其萌芽あれども、平安時代の社會事情は座の如きもの、存在し得べき状態にあり、貞觀六年九月四日太政官符に、市人諸司諸家に仕ふる事を禁せるは此種の從屬關係の裏面に利益の交換あるべきを示せるなり、壬生官務古文書に收むる永承三年八月七日の宣旨は京都の織工にして織部司の管轄を受け公役を收めつゝある者が、他の私機を禁じ織物業の獨占を得たるなり、又室町時代の民間現象たる土倉酒屋等の事實が平安朝末期に存せし事等を擧げて座の事實が少くとも平安朝期に存在せるを認め、「座」の